

二次元ドリーム文庫／PDF立ち読み版



小説 竹内けん

挿絵 あさいいちこ

第一章	オグミオスの三姉妹
第二章	未亡人の味
第三章	長女の味
第四章	次女の味
第五章	三女の味
第六章	花嫁決定

登場人物紹介

Characters



アーリー

バーミオン老の三人娘の三女。元気いっぱい生意気盛りの美少女。剣技に長け、父親にかわいがられていたバージェルに対抗意識を燃やしている。

イヴン

バーミオン老の三人娘の長女。クールな外見だが、時折きつい冗談を口にする美女。女將軍として、軍を率い国の治安を守っている。

オーフェン

バーミオン老の三人娘の次女。明るく華やかな性格で、グラマーな体つきの天才的魔法使い。バージェルを好きな事を隠そうとせず、大胆なアプローチをしてくる。

ファシリア

バーミオン老の後妻。かつては屋敷に奉仕する侍女だったが、バーミオン老に見初められて結婚する。バージェルの憧れの人だった。貞淑な雰囲気を持つ美女。

バージェル

戦災孤児だったが、バーミオン老に拾われ三姉妹と一緒に姉弟のように育てられる。以来、バーミオン家のために尽くしてきた、忠義の少年騎士。

しかし、自分のことではいいっぱいのバージゼルには相手の心情を思いやるゆとりはない。

しばし考えていたファシリアだがやがて決然と頷くと立ち上がった。

「仕方ないわね。わたくしが少しばかり女のことを教えてあげるわ。こちらにいらつしい」

「あ、はい……」

バージゼルは素直に立ち上がった。

「そこに座りなさい」

「は、はい……」

バージゼルはさながら忠犬のような素直さで座った。そこは天蓋付きのベッドのまえである。

意味がわからず戸惑うバージゼルが仰ぎ見てみると、ファシリアは肩に羽織っていたベージュのガウンを脱ぎ、黒いドレス姿になって、ベッドに上がった。そして、膝を崩した形で座ると、バージゼルと向かいあった。

「……」

息詰まる沈黙の中、ファシリアはいったん口を開いたが、なにか言いかけてやめた。それから自らを落着かせるように深呼吸したあと、赤い唇を舌で舐め回してから再び口を

開いた。

「いまから、ゼルくん^に女の抱き方を教えます」

「な、なにを……!」

我が耳を信じられず、愕然とするバージゼルを、ファシリアは静かに一喝する。

「いいから黙って、そこから見てなさい」

「はい……」

動転するバージゼルを、ファシリアは気合で黙らせた。

「まず、女をその気にさせるのは抱き締めること、それからキスよ」

ファシリアは自らのぷつくらとした、赤くぬめり光る唇を指し示した。

「唇を擦りあわせたり、唇を舐めたり、さらに舌を入れて前歯を舐めたり、舌を絡めあわせたりするの。わかった」

「はい」

「ふうー……。キスが終わったら、そうね。おっぱいを責めるのが常道かしら?」

大きく息を吐いたファシリアは首の後ろのホックを外す。そして、肩を抜くとはらりと胸元を肌蹴^{はだけ}させた。

「……っ!」

黒い豪華な刺繍の入ったブラジャーに、巨大な乳房が包まれていた。下着姿をまえにバ

ージゼルは硬直していたが、ファシリアはさらにはブラジャーまで取ってしまった。

ミルクを練り固めたような白い乳房は、円錐型で形よく垂れ下がっていた。

「うふふ、おっぱい見たくらいでなに赤くなっているの？　ゼルくんとは昔よく一緒にお風呂に入ったじゃない」

「いや、しかし……」

白く輝くような乳房である。そして、頂を飾るのはピンク色の大粒の乳首。未亡人とはいえ出産経験がないからか、子供の日の記憶と変わらず眩しいほどに美しい。

「身体の洗いっこもしたわよね。ゼルくんはわたくしのおっぱい洗うの大好きで、いつまでも飽きることなくモミモミ揉んでいたわ」

「も、申し訳ございません……」

なにも知らなかった無垢な少年時代のことを改めて指摘され、顔から火が出そうになったバージゼルは身体を小さくした。

「ううん、女を責める上では正解よ。おっぱいを揉んだら乳首が立ってくるわ」

ファシリアが軽く掌で乳首をこねると、大きな乳首がさらに膨張した。

「でも、そこでやめたらダメ。女の乳首は勃起してからが敏感なの。勃起した乳首を指で摘んだり、しゃぶったりしてしつこく責めてしまいなさい」

「……はい……」

興奮と緊張、そしてなぜか罪悪感を覚えたバージゼルは、どう答えていいのかわからず、言葉少なく応じることしかできない。

そんな童貞少年を他所に、未亡人は両の乳房を持ち上げると、自ら乳首を交互に吸ってみせた。バージゼルはそんな痴態を直視できず、俯きながらチラチラと上目遣いに見ている。

「はぁん、こうやって、女がその気になってきたなと思ったら、つぎは……」

ファシリアは白いおみ足を揃えて差し出した。

爪の先まで手入れの行き届いた美しい足である。足を見ているだけでも、息苦しさを覚えるほどに色っぽい。

ファシリアは黒いドレスの裾の中に両手を入れた。

「っ！」

バージゼルが驚愕している間に、するすると黒い布が両手で引き下ろされてきた。

小さく丸まった布切れは、まず左足首から抜き取られ、ついで右足首からも抜き取られる。それから、ベッドの枕の下に隠した。

（え、いまのもしかして、いや、まさか……ショーツ？）

今見た光景が信じられず硬直しているバージゼルのままで、顔を真っ赤に染めた貴婦人は、胸元に両手を当てて大きく息を吐いた。

「ふう〜〜」

心なしか、その吐息は桃色に思えた。

強張った顔をしている少年をまえに、若き未亡人は紅潮した顔で、一つ唾を飲んでから口を開いた。

「あの子たちには内緒よ。約束できるわよね」

「あ、はい……」

極度の緊張と性的興奮のないまぜになった美しい貴婦人の、なんともいえない気迫に压倒され、少年は頷いてしまう。

「なら、女の秘密、全部教えてあげるわ。ゼルくんの女に対する偏見を解いてあげる」

麗しい貴婦人の顔は真っ赤に紅潮し、その大きな胸は忙しく上下していた。その緊張がバージゼルにも伝播して、借りてきた猫のように大人しくしている。

「はあ、はあ、はあ……」

行き詰まる緊張感の中、ファシリアは鼻から大きく息を吸った状態で息を止め、両足の踵もベッドの端に掛けM字開脚になった。そして、黒いドレスのスカートの裾をもめくり上げていく。

「ごくんっ」

我知らず息を呑んだバージゼルのまえで、スカートの中から白い足が少しずつ露出して

くる。花卉のような爪に彩られた足。細い足首。そして、柔らかそうな^{ふくらはぎ}脛。むっちりとした太腿と少しずつバージゼルの目のまえに晒していき、ついには下半身がすべて披露されてしまった。

「っ！」

白いムチムチとした二本の足の付け根には黄金の陰毛が、貞淑な顔からはとても想像できないほどに、モッサリとしていた。

見てはならないものを見てしまったという感覚に囚われたバージゼルは、目をきつく閉じて、顔を伏せる。

「じよ、冗談はやめてください……」

「目を逸らしちゃダメ。これはね、お勉強なのよ。バージゼルくんが、あの氣位の高い三姉妹としつかりとエッチして、一番好みのお嫁さんを選ぶための」

頑なに身を硬くしている少年に、未亡人は優しく訴えた。

「ゼルくん、わたくしのことを不埒な女だと思っているの？ 夫の葬儀が終わった夜に、少年のまゝで大股を開く未亡人。たしかに軽蔑すべき女よね。でも、これはあの人の遺言を実現させるためには必要なことなのよ」

「……」

目を固く閉じ、奥歯を食いしばって耐えるバージゼルに、ファシリアはさらに訴える。

「だって、ゼルくんはあまりにもウブすぎるわ。女のことをなんにも知らない。今のままでは、喪が明けるまでにあの三人の中から花嫁さんを選ぶなんてとてもできないわ。今日だってこんなに自信を喪失させてしまつて……だから、ゼルくんはわたくしの身体を使つて、女という生き物を知つてちょうだい。さあ、目を開いて、こっちを見るの」

ここまで説得されたバージゼルは進退窮まつて顔を上げた。そして恐る恐る目を開く。まず目に飛び込んできたのは、先ほどと同じ黄金の茂み。バージゼルの顔は吸い寄せられるように、むき出しの股間に近づいてしまう。

「うふふ、これがわたくしの、いえ、女のオマ○コよ……」

少年は未亡人のヴァギナを目の当たりにして声も出ない。

恥丘は黄金の茂みが密集し、なかり濃い気がする。貴婦人然とした顔とは裏腹な動物的な感じがした。

その茂みの向こう側に、ヴァギナはあった。白い太腿の付け根に刻み込まれた肉の裂け目である。割れ目はぷつくらと膨らみ、皮膚よりも色づいた二枚の花弁がはみ出していた。「うふふ、まだダメよ。ゼルくんが見ているのは女の入り口。大切なのはこの内側なんだから……」

妖しく微笑した貴婦人は、黄金の茂みを掻き分けて、割れ目の両端に指を添え思いつきり開いた。

「あっ……は、恥ずかしい。恥ずかしくて、身体が燃えちゃいそう……。でも、これはゼルクンのため、レナスのため、ひいてはラルフィント王国のために我慢してはいけないのよね。ああ……」

自己陶酔的な溜息を漏らすファシリアの白い太腿がプルプルと震えていた。貞淑な貴婦人として知られた女性が、夫の葬儀が終わった夜、少年のままで自ら大股を開き、あまつさえ陰唇まで開いてしまったのだ。

背徳感と羞恥心が女体を焼いているかのように、乳白色の肌が桃色に染まっていく。

明らかに無理をしている。なにが彼女をそこまで突き動かしているのか、バージゼルには想像もつかなかった。

「ああ、恥ずかしい……。こんなって恥ずかしすぎる。ああ、でも、ゼルクンはよく見て。よく見なくちゃいけないのよ」

美しい白魚のような纖手が、女の媚肉を容赦なく剥いていった。花卉はゴムのように伸びる。割れ目の奥は鮮やかなワイン色をしていた。

「驚いたかしら？ 女のおマ○コってこんなに剥けちゃうのよ。いやらしいわね。でも、こういういやらしいおマ○コが、イヴウンさんにだって、オーフェンさんにだって、アーリーさんにだって付いているのよ」

「はあ……」

目を皿のようにしているバーゼルが生返事をする、ファシリアは首を振った。

「いや、見栄を張ってはダメね。わたくしのオマ○コって少し黒ずんでいて汚いでしょ」

「そ、そんなことありません。凄い綺麗ですっ!」

慌てて応じるバーゼルに、ファシリアは首を横に振った。

「うん、わたくしもオバサンですもの、仕方ないの。でも、あの三姉妹は若いし、全然使っていないようだから、きっと綺麗なピンク色をしているはずだわ。だけど、形そのものはそんなに違わないと思うの」

ファシリアは若い娘と比べられたときのことを考えて、羞恥に身を焦がしているのだから、二十代後半の女盛りの女体である。熟れた食べごろの果実のように、男の目を楽しませた。

陰唇を思いつきり広げたまま、ファシリアは説明を開始する。

「大きな穴見えるでしょ。そこがヴァギナ。男の子のおちんちんを入れる場所よ。わかるわね。でも、いきなり入れちゃダメよ。そのまえに前戯といって、女を徹底的に濡らすの。そのためには例えばここ」

ファシリアが指し示したのは、二枚の花弁のつなぎ目で、包皮を被った突起である。

「クリトリスよ。ここも剥けるわ。……ほら」

白魚のような纖手の指先が、包皮を軽くめくり上げると、肉芽が姿を現した。

「この赤い芽は女の最大の急所よ。でも、ここもいきなり責めたらダメよ。すつごく敏感だから、まず周りから責めてじっくりと高めるのよ」

バージゼルが頷くと、ファシリアは包皮を元に戻した。

「ゼルくん、指出して……」

「……はい」

バージゼルはなにも思考することができず、命じられるままに右手の人差し指を差し出した。

ファシリアは、その手を取ると、指先を自らの陰核に添えさせた。

「あつ」

「はあん……。は、はじめはこうやって、包皮の上から弄^{いじ}るのよ。やってみて……」

驚き戸惑うバージゼルだったが、命じられるままに、柔らかい包皮の上から、中に感じるコリコリとした突起をクネクネとこね回した。

「ううん、そう、そんな感じ……。そこは女にとってほんとに敏感な場所だから、優しくね」
童貞少年の刺すような視線に身を晒しながら、大股開きになって陰核を揉ませているファシリアは、それだけでは我慢できなくなってきたらしく、自ら両の乳房を揉みしだき、乳首を交互に吸いつつ、懇切丁寧に女の秘密を説明してくれた。

「あつ、そして、女が快感に慣れてきたなっと思ったら剥いちやえいいわ。はあん、ほ

ら剥いてごらんさい。そして、中身に直接触れて。あ、でも、その指で触れたらダメ。指先に唾液をつけてちょうだい。それから触って……」

バージゼルは言われるままに、右手の人差し指をしゃぶり、唾液を乗せた。そして、左手で包皮を剥き上げてから、赤い肉芽に触れた。

「ああ……っ！」

ファシリアは口唇を開いて歓喜の声を張り上げた。

そこでバージゼルは女のもっとも敏感な急所だという場所を、クネクネと執拗に弄んだ。「はああああ……。いま指を使っているけど、はあん、……。ゼルくんがあんな娘たちを責めるときには、うくっ、口で吸ったり、し、舌先でペロペロと舐めちゃいなさい。そうしたら、絶対に甲高い声を張り上げて泣いて歡ぶわ、うん……。ああ……」

熱い吐息を吐きながら、必死に解説していたファシリアだが、不意に陰部を弄るバージゼルの手を握りやめさせた。

「はあ、はあ、はあ……。どうわかった。これが前戯よ。だいたいの流れは教えたけど、ゼルくんなりに創意工夫するのも大事よ」

退廃的な微笑を湛えた青い瞳が、少年の顔を覗き込む。ただでさえフェロモンの溢れる女性だったのだが、いまやフェロモンの塊である。

「わたくしがこんなにいやらしい女で失望した？」

「い、いや……」

憧れのお姉様のあまりの淫氣に当てられた少年には言葉もなかった。

「うふふ、ゼルくん、わたくしに憧れていたものね」

「っ!？」

バージゼルの心に秘めた初恋は、すっかり見破られていたらしい。

どう答えていいのかわからず困惑する少年に、未亡人は優しく笑いかけた。

「うふふ、世のなかに聖女様なんていないのよ。どんなに取り澄ました女性だって、その正体はいやらしい牝なんだから。あの三姉妹だって、表面いくらかっこよくたって、一皮剥けばわたくしと同じよ」

妖艶に笑った麗しき貴婦人が、大股開きで濡れた陰部を晒したまま、少年の手を引いた。

「さあ、こちらにいらっしやい。おちんちん苦しいでしょ。いま楽にしてあげる」

この誘いを拒むことのできる童貞少年というのは、果たしているのだろうか。

バージゼルはさながら蜜に誘われる蝶のようにふらふらとベッドに上がっていった。

「っ!？」

身を起こしたファシリアは、バージゼルの頭を両手で挟むと、いきなり唇を重ねてきた。

「んん……っ！ うむ……んん……」

驚き身を引こうとする少年の後頭部を左手で抱き締めて、貪るような接吻をしながら、

右手でバージゼルのズボンとパンツを引き下ろし、男の生殖器を引きずり出した。

ビンビンにそそり立つ逸物は、臍に届くほどに反り返り、包皮に包まれた亀頭の先端の尿道口からは、ダラダラと止め処なく先走りの液が滴っていた。

「んっ」

接吻を終えたファシリアはただちに膝立ちになっているバージゼルのまえにうつ伏せになり、両手で逸物を握り締めた。

「ああ、遅しい。こんなに遅しいだなんて……。わたくしの恥知らずな姿を見てこんなに natte しまったのね。わたくしの責任なのね……。わたくしが責任を取らなくてはいけないのね……」

バージゼルの男根は、ギンギンに猛り狂い反り返っているが、年齢体格相応以上のものではない。しかし、発情している未亡人にはあまりにも魅惑的な宝物に見えたのだろう。

感に堪えないといった様子で、男根をシゲシゲと見ていたファシリアは、やがてカブリと上からかぶりついた。

「あっ……ファシリアさま……」

かつて感じたことのないヌルヌルとした空間に、急所を閉じ込められたバージゼルは目を剥き硬直する。

そんな少年にお構いなしに、未亡人は男根を食った。熱い唾液がダラダラと浴びせられ、



「あ、なにを、や、やめてください……」

「うふふ、どうした。こんなに大きくして」

見下ろす黒い瞳に妖しい光が灯り、口元には揶揄するような冷笑が浮かんでいる。

「すみません……」

謝罪するバージゼルを見下ろすイヴゥンは、まるで涎でも垂れたかのように手の甲で口元を拭いた。何気ない仕草なのだが、少年にはゾクゾクするほど卑猥でいやらしい仕草に感じる。

昨日までのバージゼルは、女性はみな清純な生き物だと信じていた。しかし、ファシリアのあの痴態を見せられてからは、女は見かけによらない。女にだって性欲はあるのだ、ということを知ってしまった。

「もっと、上までマッサージュしてくれ」

「は、はい……」

バージゼルの手が腰覆いの中に入ってしまった。太腿の半ばでタイツは途切れ、滑らかな生肌に触れた。表面はまるで大理石のようにツルツルなのに、程よく暖かく柔らかい。バージゼルは頬擦りしたい欲求を我慢するのに苦労した。手をじっとりと汗ばませながら、無意識、いや半ば意識して、手が少しずつ上に登っていく。

そのさまをイヴゥンの黒目がじっと見下ろしていた。ただ黙々と少年の股間を足で蹴り

続けている。

イヴウンがやめろと言ったらやめるつもりであった。しかし、イヴウンはなかなか停止を命じない。

いつ中断の命令が下るのか、息詰まるような沈黙の中、バージゼルは少しずつ揉み上がっていく。そして、ついに太腿の付け根にまでたどり着いてしまった。

新たな布の感触。ショーツの股ぐり部分に触れている。

「……くっ」

イヴウンは恥ずかしそうに口元に、拳をあてがったがなにも言わなかった。

（イヴウンさま、ここ触ってもいいんですね）

声に出しては確認しなかった。否定されるのが恐かったのだ。しかし、目で語りかけながら、バージゼルは少しずつ大胆になり、薄い布越しに、女の縦溝を探るようにじっくりと上下に擦る。

（あつ、ショーツの表面がしつとりと濡れておられる。これってイヴウンさまも感じておられるということだよな）

お姉様は身を硬くしているだけでなにも言わない。そのうちに指先に、こりつとしたしこりがあることに気づいた。

「んっ……」

そこに触れるたびにイヴゥンは悩ましい鼻息とともに、足先を痙攣させる。バージゼルの股間に押しつけられている足も震えた。

しばし躊躇ったバージゼルだが、やがてそのしこりに中指をあてがうと、クリクリクリと集中的にこね回した。

「ん、ん……、ん、……んん……」

イヴゥンは眉根を寄せて耐えていたが、やがてバージゼルの股間を責めていた左足がカクンと落ちた。どうやら下半身に力が入らなくなってしまったらしい。

バージゼルの紡ぎ出す快感を貪っている感じのするイヴゥンだが、喘ぎ声を出すことは必死に我慢しているようだった。黒い瞳を潤ませ、小刻みに震えているさまが、たまらなく色っぽい。

（ああ、この冷静沈着なイヴゥンさまが、我を忘れて乱れている姿を拝見したい……）

「ん、ふ、くう……」

股間をマッサージされて悶えている女將軍を見上げながら、少年の願望は止め処なく暴走する。

（イヴゥンさまのオマ○コをみたい！ 舐めたい！ しゃぶりたい！）

薄い布一枚の向こう側に感じる暖かく湿った女性器。そのもどかしさのあまり、バージゼルは、ついに我を忘れた。

「イヴウンさま、申し訳ありません。もう我慢ができませんっ！」

バージゼルは、目の前の邪魔な前垂れに顔を突っ込むと、イヴウンの股間へと顔を押しつけた。

「あ、こら、なにを!？」

ここに至って、さすがのイヴウンも止めた。

「イヴウンさまの味見をさせてくださいっ！」

我ながらなんて大胆な願いを言ってしまったのか、と後悔したバージゼルだが、勝算がなかったわけではない。昨日、ファシリアから洗脳されていた。

バージゼルから求めれば、三姉妹は嫌と言うはずがないというのだ。

股間に顔を埋められたまま拌み倒されたイヴウンは顔を背けて、左手の拳を唇にあてがい、横目でチラチラとバージゼルの顔を見下ろしながら思案していた。だが、やがて溜息交じりに了承した。

「仕方ないな。ショーツを脱がせるといい」

「ありがとうございますっ！」

喜び勇んだバージゼルは、両手を腰覆いの中に突っ込み、両の腰骨に掛かるショーツに手を伸ばした。

イヴウンは椅子の肘掛に両腕で身体を支えて腰を浮かせてくれた。そこでショーツは尻

から剥けて、太腿、さらに紺色のタイツに包まれた美脚を通って降りてきた。

群青色の生地に、葡萄柄の刺繍の入ったお洒落な下着である。それを両足の具足から苦勞して引き抜く。そのしつとりと濡れた布切れ。思わず顔を埋めて匂いを楽しみたい衝動に駆られたが、今はそんなことをやっている場合ではない。女性の羽衣は大事にポケットにしまってから、バーゼルは新たな願望を口にする。

「あの、両足を肘掛に掛けて、その股を開いてもらえないでしょうか？」

「……っ」

ジロリと見下ろしたイヴウンだが、いたって素直に、自ら肘掛に両足を掛けM字開脚になった。

「これでいいのか？」

イヴウンは赤面しつつも、どこまでも高慢である。

「ありがとうございます。あの、それで前垂れ、めくっていいですか？」

「好きにするといい……」

この状態で前垂れをめくったらどうなるか、イヴウンはさすがに恥じらっている。

バーゼルの心臓はバクバクいっており、破裂しないのが不思議に思いながらも、生唾を飲みながら、紺色の腰覆いをめくった。

「ああ……」

バージゼルは感嘆の吐息を漏らした。

ついにむき出しのイヴウンの股間が目の前にあるのだ。それは憧れの女性というよりも、憧れることさえもおこがましかった女神様の股間を見てしまった気分である。

昨晩はファシリアのM字開脚を見せてもらい、今夜はイヴウンのM字開脚を見せてもらったのだ。どうしても比べてしまう。

ファシリアの黄金のもつさりとした陰毛とは違って、イヴウンの陰毛は艶やかな黒だ。まるで名馬の尻尾のようだ。一本一本の毛足は長いのだが、本数は少ない感じがする。

「すごい、こんなに濡れている……」

バージゼルの思わず出た呟きに、イヴウンはきつとした目で睨みつけてきた。

「仕方あるまい。おまえがあのように弄るからいけないのだ。わたしとて生身の女だということだ。それとおまえ、わたしのことを木石ぼくせきとでも思っているのか？」

「い、いえ……申し訳ありません」

謝罪してから、バージゼルはさらなる要求を口にする。

「あの、ここ、開いていいですか？」

「……好きにしろ」

硝子細工のような顔は朱色に染まっていたが、イヴウンなりの矜持きやうじなのか、どこまでもそっけなく応じてみせた。

許可をもらったバージゼルは、ふっくらとした女陰の四方に、親指と人差し指を配して、ぐいっと広げた。

次の瞬間、少年の鼻腔をつんつとした牝の匂いが貫く。

ファシリアが言っていたように、若いぶん色素の沈着がないらしい。ただピンクというよりも鮮紅色の秘肉である。

それでいて、全体にたつぷりとシロップが掛かっていた。

生唾を飲むほどに美しく、ファシリアに負けず劣らず色っぽい、色気という意味ではやっぱり未亡人に軍配が上がるだろう。

理由は、イヴウンの陰唇は綺麗すぎる気がするのだ。愛液も半透明であり、媚肉をテラテラと美しくコーティングしているかのようなのである。それに比べて、ファシリアの愛液はグチュグチュと白く泡立っていて、物凄く卑猥な印象だった。

卑猥さは色氣に通じるものらしい。それと知ったバージゼルは、この凛々しくも知的で美しいお姉様を、もっともっと卑猥にしてあげたいという願望が胸の奥からフツフツと湧いてきた。

「そんなにジロジロ見るな。恥ずかしいだろうが……」

頭上から降ってきた不機嫌そうな声に驚いて顔を上げると、イヴウンが羞恥をかみ殺したような難しい顔をしている。

あの冷静沈着なイヴゥンにこんな顔ができるとは思わなかった。

「で、どうだ？」

「え！ なにがです？」

バージゼルが首を傾げると、イヴゥンはおずおずと質問してきた。

「わたしのオマ○コをそんなに熱心に見たんだ。感想の一つぐらいあつてしかるべきだと思うが……」

「あ、もちろん、すつごく綺麗です！ それに色っぽいし、赤貝みたいですごく美味しそうですね！」

ちなみに山国育ちのバージゼルにとって、赤貝というのは最高級の食材のイメージがある。

「美味しそうって……。男にはそういうふうに見えるものなのか……。まあ、いい。美味しそうなら食べていいぞ」

「はい、いただきますっ！」

跪いたバージゼルはイヴゥンの両足の中央に顔を埋めた。

大理石のような白く美しい肌の中央にある、生々しい女の秘肉に伸ばした舌先が、女の蜜に浸かる。

「あっ」

イヴンが小さく呻き、腰をピクッと痙攣させた。

バージゼルの舌には、ピリピリする酸味と塩分の味がする。舌触りはヌルヌルとしていた。

昨晩はファシリアの陰部に触れさせてもらい、女の秘密を隅々まで解説してもらったが、舐めさせてはもらえなかった。初めての女性器を舐める喜びに、バージゼルは思わず歓喜の声を上げていた。

「ああ、これがイヴンさまの、イヴンさまのオマ○コの味なんですね。しょっぱくて美味しいです！」

「こら、そういうことは声に出して言うんじゃない。恥ずかしいだろうがっ！」

陰部を見られた感想を聞きたがったイヴンである。おそらく今回も感想を聞きたかったことだろう。しかし、改めて指摘されると恥ずかしいらしく、叱責されてしまった。

とはいえ、舐めるなどという意味ではないらしく、バージゼルが恥ずかしい感想を言えないように、後頭部に手をあてがい、ぐいっと自らの陰部に押しつけた。

バージゼルは舌といわず唇といわず、鼻の頭まで使って、まるで犬が餌でも漁るかのように、女の媚肉を味わい尽くす。

「ああ、ダメ、そ、そんなに隅々まで舐めるのか。そんなにされたら、わ、わたし、わたしは……」

ファシリアに教えられた通りに、女の弱点を丁寧に責めると、あの冷静沈着なイヴウンが我を忘れて悶え出した。

「あああ、こ、こんなに感じるなんて……」

下腹部がヒクヒクと痙攣している。どうやらイヴウンは、陰部を舐められる快感というものを、甘くみていたらしい。

舐めても舐めても、湧き出す愛液は止め処がなかった。

いつも完璧な計算式のもとで行動する彼女が、予測を超える事態に動揺しているさまは、滅多に見られるものではない。

じっくりと襷の裏側まで舐めしゃぶっていると、だんだんと敏感な部分がわかってきた。どうやら、イヴウンは尿道口が敏感らしい。もちろん、陰核や膣穴も敏感な反応を示すが、尿道口を舐められたときには、全身が痙攣するような特殊な反応をする。

そこで尿道口を集中的に舐め穿^{ほじ}つてみた。

「そ、そこはダメっ、痺れる……」

自らの肉体の弱点を探り当てられてしまったお姉様は慌てたらしい。しかし、ダメと言われても明らかに感じている部分への責めを緩めるつもりはない。イヴウンにはもつと淫らに悶え感じてもらいたかったのだ。バージェルは執拗に尿道口を舐め穿った。

「んっ、そこを、そんなにされたら、わ、わたしいい……はああああ……」

「プルプルプルプルつと瘦身の女体の表面に痙攣が走った。イヴゥンは強すぎる刺激からなんとか逃れようと腰を悶えさせるが、椅子に嵌まった状態では思うように動けない。女の急所を舐められたい放題に舐められたイヴゥンは、ついに絶望の悲鳴を上げた。

「ああああ、もうホントにダメっ！……も、れちゃう……」

ブシュッ、ブシャシャシャシオ、ジョ——……。

執拗に舐め穿られた小さな穴から勢いよく雫が噴出した。

人一倍自尊心の強いお姉様が人前で失禁してしまったのだ。バージゼルは驚いたが、イヴゥンは完全に腰が抜けてしまっている状態らしく、放尿を止めることができない。

豪快に撒き散らしている。当然、バージゼルの顔にも掛かっていた。暖かい。

「……避けて……」

羞恥と脱力感から普段からは考えられない弱々しい声を出すイヴゥン。鎧姿の凛々しいお姉様が、惚けた顔で大股開きのままお小水を滝のように垂れ流している。

そのさまがたまらなく淫らで美しく感じたバージゼルは、イヴゥンの命令を珍しく無視した。

躊躇いもせずに口を開け、口内に入ってきた液体を嚥下する。なぜこんなことをしようと思ったのか自分でもよくわからない。ただ美しいお姉様の液体を捨てるのはもったいなく感じたのだ。



「そ、そんな……ことが……」

恐れ多くて動揺するバージゼルになどお構いなしに、ファシリアはテキパキと仕切る。

「みなさんも異存はないわね」

「たしかに、ここまでしては、もうそれしかないな」

イヴウンの言葉が三姉妹の心境を如実に表していただろう。二人の妹も頷いた。

「では、三人の中で、ゼルくんが一番お気に入りのおマ○コを選んでもらおうとしましょう」
ファシリアは、バージゼルの背中から抱きついてきた。

背中にふわふわとした巨乳が押しつけられる。そして、両手がまえに回ってきて、猛り狂っている逸物に添えられる。

右の耳の後ろから聞こえる吐息が甘く熱い。

「では、いくわよ。じっくりと味わってちょうだいね」

ファシリアは自らの腰で、バージゼルのお尻をぐいっと押した。そのまままえに進むと、イヴウンの蜜壺に、亀頭部の先端が触れた。

肉刀に熱く濡れた贅肉が絡みつきつつ、呑み込まれていく。

「あ、ああああ……!!」

妹たちから羨望の視線を浴びせられながら、イヴウンが気持ちよさそうに仰け反る。
ブツブツして吸いついてくる肉壺に浸かり、本来なら思いつきり荒腰を使いたいところ

なのだが、背後から抱きついているファシリアが重しとなって腰を動かすことは許されなかった。

「はあはあ、根元まで入ったわね。一つの穴に留まってはダメよ。他の娘がかわいそうだわ」

ファシリアが背後から腰を引いてくる。

ゆつくりと男女の結合が解けていき、イヴウンの蜜壺は男根を離すまいとするかのように吸いついてくる。

「はあああ……」

イヴウンがなんとも切なげな顔をするが、バージゼルもまた、なんとも名残惜しい。

しかし、すぐにまた背後のファシリアに押された。

男根の先から滴るイヴウンの愛液は、アーリーの小さい秘裂に雫を落としながら横切り、オーフェンの蜜壺に添えられた。

「あつ、お姉ちゃんたちにはっかかりずるいつ！」

アーリーの抗議は無視されて、背中に巨乳を押しつけてくるファシリアに操られるままに、熱く濡れた媚肉に、ズブズブズブッと沈んでいく。

「あふう……いいイ……♪」

オーフェンは歓喜の声を上げる。その表情がなんとも色っぽい。

膣壁は男根をグネグネしてヤワヤワと包み込んでくる。そして、愛液の分泌がよく、まるでシャワーのように浴びせられた。

その心地よさに浸る間もなく、またもずぼっと男根を引き抜きにかかる。

「あっ……」

オーフェンとバージゼルは、もっと堪能したいという切実な願望に囚われるが、ファシリアは容赦なく引き抜いてしまった。

外界に出た肉棒は、まるで池から釣り出された魚のようにヒクヒクヒクと痙攣してしま

う。

「はい、アーリーさんお待ちせ」

三度腰を押され、バージゼルは腰を突き出した。

「ひいう！」

姉たちの愛液に濡れ穢れた男根を、蜜壺にあてがわれたアーリーは鋭い呼吸を漏らした。濡れた秘肉の感触は、今まで一番体温が高い。それに狭くて、膣壁がザラザラして、ヒクヒクと忙しく収縮する。

しかし、ここでもまた、ファシリアにすぐに引き抜かれてしまった。

「いやあ、もっと！」

切羽詰まった声を出したアーリーは、両足でバージゼルの腰を抱こうとしたが、大股開

きの両脚を、姉たちに絡め取られてしまい、それは叶わなかった。

結局、三種類の愛液に濡れた男根は外界に出されてしまう。

「くう……」

三つの蜜壺に浸りながらも、一度として主導的に腰を使うことが許されなかったのだ。そのあまりのもどかしさに、バージゼルは発狂したいほどであった。

その心境を如実に表しているのが男根である。もっと女肉の中に浸かっていたいと自己主張するように、ビクビクビクと狂ったように痙攣している。

「うふふ、元気なおちんちんね。少しかわいそうなことしちゃったかしら？」

熱い吐息をついたファシリアは、義理の娘たちの愛液で濡れた逸物に纖手をあてがい、愛しげ揉みしごいてきた。

「うっぐ……」

たまらずバージゼルは暴発しないように、丹田に意識を集中して耐えた。

ファシリアの巨大な胸が、背中に押しつけられているだけではなく、お尻にさりげなく密着した彼女の陰阜も上下しているのだ。

猛り狂った肉棒がビクンビクンと脈打ってしまう。

「さて、これで利き酒ならぬ、利きオマ○コが終わったわけだけど、どれが一番気持ちよかったの？」

ファシリアに質問されながら、バージゼルは改めて、大股開きの女たちを見た。

右側の激ミニスカートのオーフェン。真ん中でスカイブルーの長衣の裾をまくっているアーリー。左側で鎧の腰覆いをたくし上げているのがイヴウン。いずれも陰唇から後門まで晒した卑猥なポーズ。

三つの陰唇は、たった今挿入されたばかりなのだ。如実にわかる形でめくりかえり、愛液を溢れかえらせている。

そして、三者とも赤面しながらも餓えた牝の顔をしているのだ。そのあまりにも淫らな光景に、バージゼルは眩暈さえ感じた。

「わかりません……。全部、気持ちよくて……。イヴウンさまのオマ○コは、ブツブツして吸い付いてきます。オーフェンさまのオマ○コは、グネグネしてヤワヤワと包み込んできます。アーリーさまのオマ○コは、褻が深くザラザラしていきついんです」

「っ!？」

さすがの淫乱姉妹も、自らの性器の特徴を指摘されては、含羞のあまり肩や太腿をプルプルと震わせながら顔を伏せた。

バージゼルも配慮が足りなかったと、赤面して叫んだ。

「ですが、お嬢様方は、いずれ劣らぬ素晴らしい名器なんですっ!」

もはやバージゼルは止まらなかった。背後に抱きついていいるファシリアをものともせず

に突進した。

「キヤッ！」

女たちの悲鳴などお構いなしにバージゼルは、三姉妹の蜜壺につきつきと猛り狂つてゐる逸物を挿入する。

まずはイヴウンの膾洞に沈む。そこを思う存分に突いたら、引き抜き、オーフェンの蜜壺に叩き込む。そこを挟り回したら、アーリーの蜜壺に叩き込むと力の限り腰を使った。それからまた、イヴウンの中に沈む。

ズボズボズボズボズボズボ……。

「いや、なんか、こいつケダモノになっちゃったよっ！」

たまらずアーリーは悲鳴を上げたが、姉たちの反応は違った。

「あ、すごい、
 素敵、素敵、
 素敵、素敵、
 もっと、もっと
 お願い！ もっと
 お願い！」

「あ、いい、いい、激しくされるのいい、すごくいい……っ！」

オーフェンの甘い嬌声だけではない。あのイヴウンまで人格が変わってしまったかのよう
に浅ましく腰をくねらせている。

「あん、イヤ、抜いちやダメッ！」

「バージゼル、はやくわたしのところに戻ってこい！」

オーフェンから抜いた男根を再びイヴウンの中に叩き込む。

その瞬間、自分の順番を飛ばされたのではないか、と感じたアーリーが悲鳴を上げた。

「あっ、お姉ちゃんたちばかりずるい！ あたしのところにも早くきて！」

尊敬している長姉が理性を投げ捨てているところを見て、アーリーもまた理性を投げ捨ててしまったらしい。

ここまで来たら痴情に狂わねば損とばかりに、三姉妹は乱れに乱れた。もちろん、バージェルもまた完全に狂っている。

盛りのついた犬という表現そのままに淫獣と化したバージェルは夢中になって腰を使いながらも、挿入していかない女性にもできるだけ感じてもらおうと、手や唇を使って精一杯に奉仕をした。

女たちの項にキスの雨を降らせ、胸元を肌蹴させて乳房を揉みまくる。

そんな荒々しい愛撫にも、三姉妹は互いを意識していることから、快感も相乗効果になっているらしく、嬌声はいつも以上に大きく淫らだった。

三種類の女蜜が混じりあい、泡立ち溢れかえる。溢れ出した蜜が白いテーブルクロスに大きな染みを作った。

「あっ、はあ、もっと、もっと、わたしのところに！ ああっ」

「すごく大きい。硬くて、奥までゴリゴリって擦るの♪」

「うん、凄いのお、あたしの子宮が揺れちゃってる！」

餓えた女たちが早く早くと急かすものだから、バージゼルの腰の動きはどんどん速くなっていく。

もはや三姉妹の蜜壺を味わう余裕はない。ただただ食い散らかしたというのが正しいだろう。

凄まじい荒腰である。ヌチャヌチャと卑猥な水音と、女たちの嬌声が食堂内に響き渡り、官能のあまり泣いていた。

「ひい！ あっ！ いい！ くあっ！ んんん……！ ああ……！」

順番に犯される女たち。挿入されていない女の尻が、挿入^いれられている女の尻と同じに踊った。

ただの淫獣となったバージゼルは、三つの蜜壺を順番に味わうのがじれったい。どれか一つで思いっきり、心行くまで腰を使いたい。

それができないもどかしさの中、バージゼルは左でイヴウンの腰を抱き、右手でオーフエンの腰を抱き、まるで三姉妹を一人の女と見立てたように腰を使った。

「あっ、あっ、ああっ、あん……」

ただでさえ激しかった男の荒腰がさらに激しくなった。嬌声を張り上げる女たちの足が絡みあい、バージゼルの腰を捕らえているのかわからなくなってしまった。ただザク

ザクと掘削し、パンパンパンパンと男の腰が女たちの腰を打ち据えていた。

もはや牡が果てようとしていることは、牝たちにも伝わったのだろう。彼女たちの手がバージゼルの肩や首を抱き寄せる。

バージゼルの顔は女たちの胸に包まれた。アーリーの微乳と、イヴウンの美乳と、オーフェンの巨乳に包まれる。

その柔らかい媚肉に包まれ、甘い汗と香水の匂いに包まれながら、夢中になって腰を使っていたバージゼルに限界がきた。

「もう、ダメだ、イきます！」

断末魔のような悲鳴と同時に、バージゼルは身を反らした。

その拍子に、だれの蜜壺に浸かっていたかはわからないが、男根が引き抜けた。しかし、女たちが抱き締めているものだから、男の下腹部と女たちの下腹部の間で男根が潰される。

ドビュビュビュビュビュ……。

「すごい、ビュビュってくるう」

「あはっ、おなかが熱い。あたしも、いくいつちやうう」

「あ、熱い、熱いのがおなかにいっぱいかかっているっ!？」

肉棒の先端から精液が勢いよく噴出していることを肌で感じた女たちは歓喜の声を上げる。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>